

## 虹

## 3代目より「村の医者」

## ①76 富山の在宅医療を支える

午前8時半。立ったままでミーティングは始まる。部屋の入り口には「診察室」と表示されているが、用途の多くは会議だ。富山市のまちなか診療所の医師は患者をここで診ない。建物を飛び出して、訪問診療する。

同僚の医師や看護師と情報共有を終える三浦太郎さん(42)は軽自動車に乗り込む。ハンドルは自分で握る。「運転は嫌いじゃない。気分転換になるし」

ひと月に担当する患者は40人ほど。富山市内の中心部にもいれば、山間部にもいる。患者宅との往復だけで2時間かかることもある。この日は福祉施設で暮らす40代の男性の元へ向かい、気管に付けた器具を交換した。1年ほどの付き合いでも信頼関係ができていのだろう。カメラを向けると、2人でポーズを取った。

三浦さんは総合診療医だ。とにかく幅広く患者を診る。病気の背景や生活事情を踏まえ、薬剤師や福祉関係者とも連携する。

コミュニケーションが難しかったり、多病だったり。他の病院からは断られた患者も少なくない。人工呼吸器や胃ろうの人もいる。最期もみとる。「昔の医者の中にはこれから亡くなる人のための医療を『負け戦』って言う人がいた。でも、僕は映画に託ってのフィナーレだと思う。慣れない病室じゃなくて、家で安心して過ごせたら少しはいい終幕だって思えるかもしれない」

仕事を語る言葉に体重が乗っても、口調は淡々とゆっくりしている。学生時代のニックネームはカメだった。「見た目かなあ。あと、名前が浦島太郎みたいだし」

◇

小学生に憧れの職業を尋ねるアンケートでは、医師は毎年上位にランクインする。それに身内が医師なら子どもは往々にして同じ道をたどろうとする。

三浦さんもそうだ。群馬県前橋市にある実家は、祖父の代から続く耳鼻科の診療所だった。「医者になれ」と強制されたことはないが、期待とプレッシャーは感じた。そもそも太郎という名は、当時の日本医師会長の名前にあやかったものだ。当然、耳鼻科の診療所の3代目になると思っていた。

医学部は最難関学部の一つ。しかし、主将を務めた弓道部に青春を捧げたから成績はそれほどでもなかった。高校2年生の冬には担任の教諭から「このままなら医学部は無理だな」と断言された。

のんびり屋なのか、それほど焦りもなかった。受験勉強なんて目標をクリアするゲームだと思えばいい。受験の終盤になると、なんとかそれなりの成績が取れるようになっていた。第1志望ではなかったが、現役で医学部に入れた。富山医科薬科大(現富山大)だった。名前しか知らない大学だったが、「医師免許さえ取れたらよかった」。

◇

2000年。なんとなく来た富山は生まれ育った前橋より都会に見えた。中心部にはデパートがまだ二つあった。さらに地元の民放テレビ局が三つもあることに感心した。ちょっとしたイベントに足を運んでも記者が取材に来ている。群馬は一つしかないから、テレビは東京発信の情報ばかりだ。前橋より、地元愛にあふれた街だと思った。



「木枯らしが」 広田 郁世

土地は気に入ったが、大学の授業には身が入らなかった。どうせ耳鼻科を継ぐ。せっかくなので心臓や法医学のスペシャリストの講義も耳を通り抜ける。結果として、学業の成績は下から3番目という状況に陥った。

耳鼻科の3代目になるとして、実家以外の診療所の様子も見てみたかった。4年生の夏休み、群馬県赤城村(現渋川市)の診療所を見学した。人口1万人強の小さな村にある公営の診療所だった。日々研究が進む大学病院に比べれば、「時代遅れの診療所だろう」とあなどっていた。

所長が1人で患者を診ていた。高熱の老人、胃痛の女性、捻挫した少年。症状が全く異なる患者に次々と対応していく。スピーディーに的確に、そして鮮やかに。まるでカンフー映画に出てくる老師のようだった。

診療の合間にはインターネットで最新の

論文を読み、新しい知識を吸収している。大学では教壇にも立っていた。勝手に想像した「時代遅れの診療所」の医師と違った。

息子の心境の変化に気付いたのだろう。父が大学病院の教授との食事の席を用意してくれた。酒を酌み交わしながら、その教授はこう言った。「開業医は代替わりして技術を更新しなきゃね」。跡継ぎへの誘い文句だったのかもしれないが、三浦さんには「代替わりした瞬間がピーク」と聞こえた。

脳裏に浮かんだのがへき地の診療所で活躍する医師の姿だった。踏み切りがついた。「村の医者」になる。「今思えば、開業医で頑張っている先生なんてたくさんいる。でも、『成長し続けるならこっち』って思っちゃったんですよ」。探究心に火がついていた。耳と鼻、のど以外の病気も診たか

った。

耳鼻科の診療所を継いでもらえるものかと思っている父に意思を伝えた。言葉少なに納得してくれたが、あとで母に聞くと落ち込んでいたらしい。「前橋なら僕じゃなくても耳鼻科をやる人はいる。父には申し訳ないけど交換可能じゃないですか。でも『村の医者』はそうじゃない」

◇

腰を入れて勉強したくなった。へき地では、医師をたくさん確保できない。だから、深い専門性よりも、多様な疾患に対応できる技術と知識の幅広さが求められる。しかし、まだ総合診療という言葉も一般的でなく、関連する書籍も見当たらなかった。

幸運なことに大学の付属病院に総合診療部ができた。複数の健康問題に悩む患者を広い視野で治療する部門だった。へき地の

医師に求められる資質だ。

大学5年生になると、そこに赴任した教授の山城清二さん(67)の研究室に入り浸った。医学科や看護学科の学生を集めて勉強会も立ち上げた。山城さんは「彼は人と人をつなぐのが昔から上手。こういうやつが富山に残ってくれたらいいなって思っていました」と振り返る。

大学卒業後、三浦さんはへき地の医療支援に携わる公益社団法人で研修医になった。その後、北海道池田町の病院で勤務した。人口7000人程度の小さな街だった。家族まるごと診療することもあれば、医療関係者と連携して住民が健康について語り合う催しも自ら企画して定期的に開いた。憧れの「村の医者」になった。

◇

もう一度富山と接点を持つ転機が訪れた。2017年にオープンする富山市のまちなか診療所に誘われた。構想に関わった恩師の山城さんの呼び掛けだった。富山は愛着のある街だ。働く理由にはなる。

診療所は、住宅街だろうと山の中だろうと、病気や障害によらず、住み慣れた場所で過ごし続けられるようにするという理念を持つ施設だ。医師は在宅医療に専念する。まちなかにも、へき地にも縛られない「村の医者」の発展形に見えた。

当時の調査では、富山市の約半数の人が自宅での最期を望むが、現実にそうなるのは1割程度だった。人口20万人以上の都市ではワースト2位という数字だった。訪問診療の充実は、在宅での最期を支えることにつながる。それには仲間が必要だ。

「富山みたいに高齢化の進む地方が大半です。高齢者はたくさん健康問題がある。総合診療医なら対応できることが多い。だから仲間を増やさないといけない。そして富山の医療が日本の最先端になる」

場数は踏んだ。成長している手応えはある。診療以外の役割も増えた。行政と民間の医師たちの会議があれば、橋渡し役にもなる。子どもの頃に思い描いた姿とは少し違うけれど、診療所の医師であり続ける。

総合診療医は臓器や疾患を限定せずに診療します。他の領域の専門医や福祉の専門職と連携して、地域住民の健康と生活を支えます。三浦さんによると、ある総合診療医は専門を尋ねられると「あなたの専門です」と答えるそうです。全身まるごと診るということですね。地方の医師不足に対応するため、欠かせない存在です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社  
メディアビジネス局

## 「虹」第8巻 販売中

最新刊の第8巻「虹 誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141~160回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は1月1日(月)です。